米子八幡神社の神像

平成24年から平成28年にかけて米子八幡神社の本殿から32点の木彫刻類が確認されました。このうち神像とみられる彫刻は 17 体を数えます。これまで鳥取県下での神像は、三朝町・三佛寺所蔵の男神像・女神像しか知られていません（鳥取県立博物館『鳥取県の仏像調査報告書』による）。そうしたなかで、平安時代にさかのぼる神像が米子八幡神社からまとまって確認されたことは、この地の宗教事情や彫刻史のうえでたいへん重要な資料と考えられます。

一般に神社に安置される神像は「ご神体」とされて一般公開されることはあまりありません。今回確認された神像のなかには、虫喰いの被害が著しく姿や形がよくわからない像も含まれますが、比較的保存状態のよい神像を紹介し、米子八幡神社の社史をはじめ地域の歴史を考える上で参考になればと思います。

1 女神坐像 像高 52.2センチ 平安時代

丸い顔の女神像で右膝を立てて坐っています。

髪を束ねて頭の上で丸く結い上げ、さらに髪を左右に振り分けて両肩前に垂らし、衣の上からは外套衣（がいとうえ）、領巾（ひれ）を着しています。髪には墨、外套衣には朱、両袖や領巾、裳には緑青の彩色が残っています。両手は手首以下が失われています。一木造で内刳り（うちぐり）はありません。

大ぶりな造形で、ボリューム感のあるどっしりとした像で、丸い豊かな面相は平安時代の神像の特徴をよく示しています。木芯を像内中央にこめているために躰の中央から右側頭部にかけて大きな干割れが走っています。

鳥取環境大学 浅川滋男氏の測定調査によれば、材質はムクノキで、伐採された年代は862-973年とされ、制作時期もおおむね10世紀末から11世紀頃と考えられます。片膝を立てて坐す神像は全国でも数少なく、鳥取県下で最も古い神像に位置する作品です。

2 女神坐像 像高 50.4cm 平安時代

丸い顔の女神像で、左膝を立てて坐っています。

髪を束ねて頭の上で丸く結い、髪を左右に振り分けて両肩前に垂らすなど、先の女神像とよく似ていますが、おだやかな表情でやさしさが感じられる像です。赤い彩色は後世に施されたものです。

像底をみると年輪が２つあることがわかります。枝分れした木の部分などを使ったと考えられ、彫刻用材としては不向きな材を敢えて使用していることから「御神木」など由緒のある木を使用したと推測できます。

この像も鳥取環境大学 浅川滋男氏の測定によれば、材質はムクノキで、伐採年代は 860-973 年とされ、制作時期もおおむね 10 世紀末から 11 世紀頃と考えられます。

3 僧形八幡神像 像高 59.2cm 平安時代

わずかに右上を向いた僧形の坐像です。剃髪ながら白毫や髪際を表わす痕跡はなく、両耳はやや正面を向けて、耳たぶに孔が開いていません。衣を右前（右衽）に着け、その上から袈裟をまとっています。また組んだ足元には平緒のようなものがのぞいています。右手先は後世に補われており拳の方向が間違っていますが、本来は結んだ拳が上を向きます。広葉樹の材（おそらくムクノキ）による一木造で内刳り（うちぐり）はありません。

地蔵菩薩像としては、首に三道が認められないなど不自然な点が多く認められ、僧形八幡神像ではないかとみられます。制作時期はおおむね 10 世紀末から 11 世紀頃と考えられます。

4 女神坐像 像高 33.8cm 平安時代

髪を束ねて結い上げさらに髪を左右に分け、内衣を右衽（うじん・最初に右から着用する）に着し、その上から外套衣（がいとうえ）を着した女神像です。

首元のU字は外套衣の襟にあたります。襟元には墨線で模様を描くほか、右手内側には朱が残っています。

首にはフリル状の装飾を描いています。木芯を像底中央にこめた一木からすべてを彫り出している。

ふくよかな丸い顔にやや厳しい表情をみせていますが、豊かで柔らかな躰の造形に平安時代後期の神像の典型をみることができ、制作時期も12世紀後半頃（平安時代後期）とみられます。両手先は失われていますが、右手には持物を持っていたと推測されます。

5 女神坐像 像高 33.2cm 平安時代

上の女神像（4）の対になるとみられる女神像です。

外套衣の襟元には墨線で模様を描くほか、右腹前には花文、右手首にはフリル状の装飾を描いています。この女神像も木芯を像底中央にこめた一木からほぼすべてを彫り出しています。

丸い顔にやさしい表情をみせており、なで肩の躰には、ほどよい肉付けが与えられ、全体を二等辺三角形に収まるような整ったプロポーションを示す造形からは、12世紀後半頃（平安時代後期）の制作と考えられます。両手先は失われていますが、左手先には持物（団扇か）を持っていたと推測されます。下半身に虫食いなどの被害もありますが、全体に保存状態も良好な女神像です。

6 僧形八幡神像 像高 34.8cm 平安時代

剃髪姿の坐像です。内衣・外衣を着け、両手は胸前で拱手（きょうしゅ）していますので、僧形神像とみられます。この像も耳たぶには孔が開いていません。外衣の表面には、衣文や袖の重なりを墨線で描いており、背面には袈裟を着けたような刻線が刻まれています。一木造で、木芯は背面中央をわずかに外しています。

丸い顔に見られる表情は若々しく、なで肩の造形や墨線で描かれる衣文から、先の女神坐像（像高 33.2cm）と同じ 12 世紀後半頃に、同じ作者、工房によって制作されたと考えられます。

僧形神像は、もっぱら若宮や僧形八幡神像とみなされることが多く、八幡神社と深いかかわりをもつ神像といえます。

7 女神坐像 像高 30.3cm 平安時代

髪を束ねて結い上げさらに左右にふり分け、内衣・外衣を着し、両手は胸前で拱手（きょうしゅ）する女神像です。膝の部分は朽損していますが、僧形八幡神像と同じくゆるやかな膨らみをもつ造形です。髪を墨彩とし拱手した袖口には墨による衣文が描かれている。また左肘の袖口にはフリル状の装飾を墨で描いている。木芯を像左斜め前にはずした一木からすべてを彫り出しています。

丸い面相や襟元の造形や墨描きなどは僧形八幡神像と共通しており、制作時期も１２世紀後半頃とみられます。わずかに首をかしげるポーズはその表情とあいまって非常に魅力的な女神像です。

8 男神坐像 像高 37.2センチ 平安時代

巾子冠（こじかん）とよばれる冠をかぶり、袍（ほう）を着け、両手は胸前で拱手（きょうしゅ）する男神坐像です。両手に握った笏も含めて一材から彫り出しています。波打つ眉や見開いた眼、小さな口を閉じたやや面長な顔付きに、墨で描いた眉や髭からは独特の表情がうかがえます。

丸みを帯びたなで肩や柔らかな躰の造形からみて制作時期は１２世紀後半頃（平安時代後期）と考えられます。

虫食いによって左側、特に左膝の部分は損なわれていますが、本来は右側の膝と同じく左右に張り出しており、左右対称の造形であったとみられます。

9 男神坐像 像高 29.0センチ 平安時代

両手を胸前で拱手（きょうしゅ）し、笏をとる男神像です。着衣は、両肩口の下にＶ字状の切れ込みを表わすことから袍（ほう）ではなく狩衣（かりぎぬ）ともみられます。冠も中央で左右に膨らみをもつことから、立烏帽子（たてえぼし）とみられます。

眉を寄せてややいかめしい威厳のある表情をしています。手にした笏も含めて一材から彫り出して全体を二等辺三角形にまとめ上げた造形となっています。正面からは平板的にみえる造形で、躰の奥行は浅いことから、制作時期は 12 世紀後半（平安時代後期）に考えられ、この期の男神像の典型例のひとつとして貴重です。

10 女神坐像 像高 19.6cm 平安時代

髪を束ねて結い上げて頭上で花弁状に広げて、左右に髪束をふり分けた女神像です。衣の上から外套衣（がいとうえ）を着しており、両手は胸前で拱手（きょうしゅ）しています。

残念ながら顔の部分が損なわれて表情はわかりませんが、丸い顔やなで肩の躰には、ほどよい肉付けが認められることから、12世紀後半頃（平安時代後期）の制作と考えられます。小像ながらまとまりのある女神像です。

11 男神像 像高 32.2cm

立烏帽子（たてえぼし）をかぶり、袍（ほう）を着て坐る男神像です。すべて一木から彫り出されており、薄い躰に比べて頭部や烏帽子の奥行は深い造形です。

顔をやや左に向けていることや右手を曲げ、左手を膝前に置くこと、像底中央に8mm×1cmの四角い孔が開けられていることから、これまで見てきた神像とは異なった神像であることがわかります。

想像をたくましくすれば、菅原道真や柿本人麻呂などは、死後、神として祀られ、ゆかりのある神社では「御神体」とされています。そうした特別な信仰をうかがわせる男神像とみられます。制作時期については不明ですが、中世から近世にかけての作品とみられます。

米子八幡神社

米子八幡神社は、誉田別尊（ほんだわけのみこと・応神天皇）を主祭神、ほかに足仲彦尊（たらしなかつひこのみこと・仲哀天皇）、息長足姫尊（おきながたらしひめのみこと・神功皇后）など五柱を祀る神社です。社伝によれば、古くは相見庄の鎮守として奈良時代に宇佐八幡宮から勧請されたと伝えられています。また一説によると西伯耆の長者原（現伯耆町）に勢力を持っていた紀氏一族の巨勢（こせ）氏が彼地に建立したとも言われ、大寺村（同町大殿）には神宮寺があったとされます。中世には「相見八幡」、「相見庄八幡宮」などと称され、相見庄の鎮守社であったことがうかがえます。

現在、八幡神社は日野川北岸に鎮座しますが、神社に残る棟札（写）によれば、天文 19 年（1550）に日野川の大洪水に見舞われ、八幡神社は、この洪水で社地社殿を流失したため、いったん字フルヤシロに再建されましたが、天正 17 年（1589）に現在地である馬場村に移転したとされます。この折、神主は相見氏から内藤氏に代わり、内藤綱宗はその後、豊臣秀吉の朝鮮出兵に加わり、その功により菊桐紋付神主乗物と三番叟翁面が奉納されたと伝えます。

近世以後は八幡社領 40 石が与えられ、藩主の祈願所に指定され、しばしば祈禱札を納めていました。文政年間には四日市・八幡・水浜などから岩屋谷・殿河内・大寺の 18 か村が氏子となり、毎年氏子札が公布されています。

明治初年には境内末社物部大連神を合祀、大正 6 年（1917）には福市の西千田神社・武内神社・東堀神社、水浜の水浜神社を合祀し、今日に至っています。

米子八幡神社の神像

編集：長谷洋一（関西大学）
平成 28 年 3 月 20 日
米子八幡神社
〒689-3535　鳥取県米子市東八幡 276